



「人のことを大切にしてい聞く子どもにする教室」

ススキの穂が風に揺れ、秋の訪れを感じる頃となりました。コロナ禍の中で迎える2度目の秋ですが、各学校においては子どもたちの豊かな心の育成や健やかな成長を願い、感染防止対策を講じながら学習活動や学校行事等の充実に向けてご尽力されていることと思います。

さて、学級や授業がうまくいかいかないかの境目は子どもたちが先生の話の聞くか聞かないかにかかっています。授業を進めていく上で、発言の仕方とともに聞き方の技術を上げていくことが大切です。聞き方の技術が身につけていない場合には、どんなにすぐれた発言がなされていても、それが学級の共有財産となりうる可能性は極めて小さいです。

県教育委員会は、「魅力ある学校づくり」の共通実践として「人のことを大切にしてい聞く」ことを推奨しています。そして、支持的風土が醸成されているかどうかを判断する一つの基準は、友達の話に「耳を傾ける」ことができているかどうか、と述べています。

1,心を集中して聞く

人の話を聞くときに、何より大切なことは、「ぼんやり聞かない」ということです。心を集中して聞く、ということが大切です。

「聞く」ということは、能動的で、積極的な営みです。

自分の頭の中で、相手の話に対して、その内容の当否、論拠の確かさ、客観性の有無、思いの深浅などを、常に評価し続けるということです。

国語授業の名人「野口芳宏」さんは、教室の子どもたちに、人の話を聞くときの心構えについて述べています。

「なぜか?」 「ほんとか?」 「正しいか?」

「この三つを、いつも頭の中において人の話を聞きなさい。そして、分からないことは尋ねなさい。はてなと思うことは確かめなさい。誤りだと思うことは指摘しなさい。」
しかも、折に触れ、時を選んで、繰り返し、繰り返し、繰り返し話し、忘れないようにしているとのこと。

2,教師は発言しない子に目を注ぐ

教師は、挙手をして発言をする子、授業をリードしていく子に目を注ぎがちです。発言している子の顔を見ながら、うなずきながら教師は話を聞くことが多いです。しかし、発言者以外の子どもはどのようにしているのでしょうか。

よそ見をしてもいいし、手いたずらをしてもいいし、ぼんやりしてもいいのです。話なんか聞かなくて別に困りはしないのです。

こういう子どもたちをほっておいてはいけません。こういう子どもたちにこそ教師は目を注がなければいけません。

具体的に教師は、次のような点を観察し、評価し続けることが大切です。

- 一人残らずの子どもが話す相手の顔を見つめているか。
- うなずいたり、首をかしげたりしながら、集中して話を聞いているか。
- メモをとりながら、話を聞こうとしているか。
- よそ見をしたり、手いたずらをして授業から外れている子はいないか。
- 話の内容は十分に聞き取られ、理解されているか。

教師は、このように、気のついたことを、ほめ、あるいは励まし、またたしなめ、戒め、注意をし、全員参加のもとに、授業が展開されるようにすることが必要です。また、聞き手の表情から、次に誰を指名したらよいか、ということもおおよそ見当づけることもできます。

3,勝手にしゃべらせない

授業をしているときに、勝手にことばを発する子どもがよくいます。

自分の頭の中に思い出されてきたことを、すぐに声に出して喋る子がいらないだろうか。

担任は、そういう子どものことばに、半ば迷惑そうな顔をしながらも、おおかたは甘く付き合っています。

しかし、聞く番になっているときは、話し手が話しやすいように、黙って聞いていることがマナーであり、また、そうしていなければ相手の言うことがよくわかりません。

慣用句に「話の腰を折る」というのがあります。相手の話の腰を折るほど失礼なことはありません。こういうときは、次のようにたしなめます。

- 口を閉じなさい。今は、あなたが話すときではありません。
- やかましいです。静かに聞きなさい。
- 話をしたかったら手を挙げなさい。教室はみんなで勉強するところです。勝手に喋ってはいけません。

4,「聞く力」の評価

「聞く」ことを評価しようとするとき、外側から客観的に判断するのは難しいです。よって、子どもに自己評価させることが「聞く」ことの評価の中心になると考えます。

しかし、自己評価は、絶対評価ではないため、成績をつけることには適していません。

子ども自身が評価していくと、「私の聞き方のこの部分が、まだまだだと思う」とか「最近、私の聞き方はよくなってきたと思う」などと、自分の成長を実感できます。自ら学ぶ子どもを育てるにもつながるのではないのでしょうか。

例示として、「聞く力」のルーブリックを紹介します。一日の終わりに、今日の自分を振り返ってみてはどうでしょう。「先生の顔を見て話が聞けた」は「○」。「相手の顔を見て話が聞けた」は「△」。「最後まで話が聞けた」は「○」。「話の順番を考えながら話が聞けた」は「△」。「大事なことがわかった」は「△」。

「聞く力」のルーブリック

	ステップ1(低学年)	ステップ2(中学年)	ステップ3(高学年)
態度	○先生の顔を見て話が聞けた。 ○相手の顔を見て話が聞けた。	○相手の顔を見ながら話が聞けた。 ○うなずきながら話が聞けた。	○相づちをうちながら話が聞けた。 ○同意できることには、うなずきながら話が聞けた。
技術	○最後まで話が聞けた。 ○話の順番を考えながら話が聞けた。	○話し相手に質問ができた。 ○話を聞きながらメモが取れた。 ○相手の話の組立てを考えて聞くことができた。	○話している相手の気持ちを考えて聞けた。 ○自分の考えと比べながら話が聞けた。
内容	○大事なことがわかった。	○相手の言いたいことがわかった。	○相手の主張、意見や理由がわかった。

11月 教育研究所事業

4日 (木)	初任者研修①	オンデマンド
9日 (火)	中堅教諭等資質向上研修①	オンデマンド
配信中～12日(金)	学力向上に係る研修会【講演会】	中山芳一氏
24日 (水)	令和4年度 教育研究員応募メッセ	

第117期

10月5日(火)に、第117期教育研究員の入所式が行われました。



- 【後期研究員】 前列右から
- 津嘉山麻希 研究員 天妃こども園(幼児教育)
 - 長嶺文士郎 研究員 泊小学校(総合的な学習の時間)
 - 伊波 勝之 研究員 仲井真中学校(中学校 社会科)
 - 上原 亮輔 研究員 上山中学校(中学校 外国語)